

大学生が考えている職業選択観と就職に必要な力

吉 田 佐治子*

Outlook on Job Choice and Competence Necessary for Finding Employment that a University Student Thinks about

Sachiko YOSHIDA

大学生が「職業選択において重視しているもの」と「学生が就職していくにあたって必要となる能力」についてどのように考えているか、大学生 252 名を対象に調査を行った。「職業選択において重視しているもの」については、18 の選択肢から第 1 位～第 3 位として選ばれた項目、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」については自由記述の内容を分析した。全体の結果は、「職業選択において重視しているもの」としては「仕事内容が好きだと思える」が最も多く、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」としては「コミュニケーション」「能力」が頻出語であった。調査参加者の属性で検討した結果、「職業選択において重視しているもの」第 1 位で専攻学系による違いがみられた。また、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」においても、属性によって特徴的な語が抽出された。

*撰南大学

はじめに

ほとんどの大学生が、大学を卒業後職業に就く。大学入学前の、志望大学を決める際にも、約3分の1の高校生が「なりたい職業に就ける」ことを重視しており（山下，2013a），高校生の保護者も約55～70%が「なりたい職業に就ける」「就職実績が優れている」「なりたい職業を見つけるための支援が充実している」「専門的な職業に就くための支援が優れている」ことを重視している（山下，2013b）。「生きていくために働く」のは当然のことではあるが、現代の高校生（と保護者）は、将来、職業に就くことを前提として大学に進学してきている。こうした学生は大学在学中も、明確には認識していなくとも、常に「就職」を意識しているのかもしれない。

「キャリア教育」という言葉がはじめて政策文書に使われたのは、1999年の中央教育審議会答申である。現在の大学生は、高校までに何らかのキャリア教育を受けてきた世代であり、「働く」ということに対して、強く意識づけられているものと考えられる。また、大学に入学した後は、早い段階から就職に向けたアセスメントテストを受ける機会が設けられ、さらには、インターネット上などに、いわゆる「就活」情報があふれている。こうして、ますます「就職するためには」という意識が醸成される。

上記アセスメントテストのいくつかは、「『優秀なビジネスパーソン』への学生の到達度を測る」（富岡他，2016）のものであり、「優秀なビジネスパーソン」像を示したものと見える。こうしたアセスメントテストを受けた学生には、「このようにすれば『優秀なビジネスパーソン』になれる」と受け取られる可能性が高い。

ここで、「『優秀なビジネスパーソン』とは何か？」ということが問題となる。これは興味深い問いではあるが他に譲ることとし、本稿では、「優秀なビジネスパーソン」への道を歩き始める前、学生が社会に出るまでに身につけておくべき力について検討することとする。

「社会に出るまでに身につけておくべき力」について、キャリア教育の観点からは、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）の報告書において、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を引き、いわゆる「4領域8能力」があげられている。「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」は、社会的自立・職業的自立に向けて、キャリア発達にかかわる諸能力をどう育成していくか、小学校から高等学校までの発達段階に応じて具体的に述べたものである。「4領域」とは「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」であり、それぞれの領域をさらに2つに分け、「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」「情報収集・探索能力」「職業理解能力」「役割把握・認識能力」「計画実行能力」「選択能力」「課題解決能力」の8能力としている。

「社会に出るまでに身につけておくべき力」とは、「社会が求めている力」ともいうことができる。こうした観点からは、内閣府人間力戦略研究会（2003）の「人間力」や、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」、厚生労働省（2004）の「若年者就職基礎能力」などがある。内閣府の「人間力」は、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間

として力強く生きていくための総合的な力」と定義され、その構成要素として、「知的能力的要素」「社会・対人関係力的要素」「自己制御的要素」をあげている。経済産業省の「社会人基礎力」は、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」であり、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3能力から構成されている。また、職場等で活躍していくためには、「社会人基礎力」だけではなく「基礎学力」「専門知識」も必要であり、さらに「人間性、基本的な生活習慣」が基盤となるとしている。厚生労働省の「若年者就職基礎能力」は、事務系・営業系の職種について、「企業が採用に当たって重視し、基礎的なものとして比較的短期間の訓練により向上可能な能力」であり、具体的には、「コミュニケーション能力」「職業人意識」「基礎学力」「資格取得」「ビジネスマナー」である。

これら類似性の高い種々の「能力」を改めて分析し、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として再構成したのが、「基礎的・汎用的能力」（中央教育審議会、2011）である。「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成されている。

さて、厚生労働省の「若年者就職基礎能力」は、実際に企業に「採用時に重視する能力」等について調査した結果にもとづくものであるが、より直接的に、経済界から発せられたメッセージも多い。企業の採用HPには、「求める人物像」が記載されている。また、日本経済団体連合会（2017）は、会員企業を対象としたアンケート調査の中で「選考にあたって特に重視した点」を尋ねており、「コミュニケーション能力」が15年連続で第1位、「主体性」が9年連続で第2位、「チャレンジ精神」が第3位となった結果を公表している。また、学生を対象とした就活情報の中で「企業が求める力」を紹介しているものも多く、例えば松岡（2016）は、企業が求めているのは「コミュニケーション能力」であるとした上で、その「コミュニケーション能力」について解説している。

以上のように、「採用する側」「おとな側」から学生に向けた発信は多い。それでは、学生は「職業観」や「社会に出るまでに身につけておくべき力」についてどのようにとらえているのだろうか。本報告では、大学生が考えている「職業選択にあたって重視しているもの」「学生が就職していくにあたって必要となる能力」について検討することを目的とする。

方 法

1. 調査参加者

大学生 252名（男性 127名、女性 118名、不明 7名；18歳 11名、19歳 41名、20歳 47名、21歳 69名、22歳 61名、23歳 12名、24歳・25歳・26歳・27歳・33歳各 1名、不明 6名；2011年度入学 1名、2012年度入学 11名、2013年度入学 96名、2014年度入学 49名、2015年度入学 45名、2016年度入学 33名、不明 17名；一般入試 86名、指定校推薦入試 41

表1「職業選択にあたって重視しているもの」の選択肢

1.成長できる	10.体を動かす仕事である
2.能力を発揮できる	11.社会的地位が高い
3.成果が目に見える	12.未開拓の分野である
4.世の中のためになる	13.仲間と楽しく過ごせる
5.自分で物事を決められる	14.色々な種類の仕事を経験できる
6.自分の力で何かを生み出せる	15.長く勤められる
7.収入が高い	16.完璧な仕事を追求できる
8.収入が安定している	17.仕事内容が好きだと思える
9.私生活とのバランスがとれる	18.人からカッコいいと言われる

名、公募推薦入試 96 名、AO 入試 8 名、センター試験利用入試 8 名、専門学科推薦・スポーツ推薦 5 名、不明 8 名)

2. 調査時期

2016 年 11 月～12 月

3. 調査票

調査は、「摂南大学就業力アセスメントテスト（予備調査）」の一環として行われた。このアセスメントテスト（予備調査）は、学生がライフデザインをするためのツールとなる尺度作成を目指して、個人の特性を総合的にとらえる概念の整理と測定のための調査項目の検討をしたものである（富岡ら、2016；富岡ら、2017）。調査票は、個人特性を測定するための質問の他に、「職業選択にあたって重視しているもの」、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」、調査参加者の個人属性（性別、年齢、所属学部・学科、入学年度、合格した入試制度）からなり、本稿で報告するのは、「職業選択にあたって重視しているもの」、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」についてである。なお、「職業選択にあたって重視しているもの」については、選択肢から順位をつけて 3 つを選ぶものとし、「学生が就職していくにあたって必要となる能力」については、自由記述とした。「職業選択にあたって重視しているもの」の選択肢を表 1 に示す。

4. 手続き

調査は無記名で実施した。調査者による一斉教示の後、回答は個別に行われた。回答時間はおよそ 20 分であった。

結 果

分析にあたり、無回答、不適当な回答は集計から除いた。また、以下、選択肢番号を、例えば (1) のように示す。

1. 職業選択にあたって重視しているもの

(1) 全体的傾向

「職業選択にあたって重視しているもの」第 1 位～第 3 位として選ばれた項目と、これらを合計した結果を表 2 に示す。

表2「職業選択にあたって重視しているもの」選択結果

(選択肢については表1参照)

第1位

選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
人数	38	15	1	16	1	4	19	40	31	0	2	0	19	1	10	0	49	0	246
%	15	6.1	0.4	6.5	0.4	1.6	7.7	16	13	0	0.8	0	7.7	0.4	4.1	0	20	0	100

第2位

選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
人数	19	14	8	11	1	10	19	45	38	2	5	1	26	2	19	1	24	1	246
%	7.7	5.7	3.3	4.5	0.4	4.1	7.7	18	15	0.8	2	0.4	11	0.8	7.7	0.4	9.8	0.4	100

第3位

選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
人数	23	17	7	15	4	3	18	25	26	7	7	1	40	5	16	0	24	7	245
%	9.4	6.9	2.9	6.1	1.6	1.2	7.3	10	11	2.9	2.9	0.4	16	2	6.5	0	9.8	2.9	100

合計

選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
人数	80	46	16	42	6	17	56	110	95	9	14	2	85	8	45	1	97	8	737
%	11	6.2	2.2	5.7	0.8	2.3	7.6	15	13	1.2	1.9	0.3	12	1.1	6.1	0.1	13	1.1	100

第1位～第3位と合計について、選ばれた項目に偏りがあるか χ^2 検定を行ったところ、それぞれ偏りは有意であった ($\chi^2(13)=194.11, p<.01$; $\chi^2(17)=216.41, p<.01$; $\chi^2(16)=126.07, p<.01$; $\chi^2(17)=586.06, p<.01$)。残差分析の結果は、次の通りである。すなわち、第1位については、〈1〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈11〉〈14〉〈15〉より多く、〈4〉は〈3〉〈5〉〈14〉より多く、〈7〉は〈3〉〈5〉〈11〉〈14〉より多く、〈8〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈11〉〈14〉〈15〉より多く、〈9〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈11〉〈14〉より多く、〈13〉は〈3〉〈5〉〈11〉〈14〉より多く、〈17〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈11〉〈13〉〈14〉〈15〉より多かった。第2位については、〈1〉は〈5〉〈10〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈7〉は〈5〉〈10〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈8〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈9〉は〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈13〉は〈5〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈15〉は〈5〉〈10〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈17〉は〈5〉〈10〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多かった。第3位については、〈1〉は〈6〉〈12〉より多く、〈2〉は〈12〉より多く、〈7〉は〈12〉より多く、〈8〉は〈5〉〈6〉〈12〉より多く、〈9〉は〈5〉〈6〉〈12〉〈14〉より多く、〈13〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈18〉より多く、〈15〉は〈12〉より多く、〈17〉は〈5〉〈6〉〈12〉より多かった。第1位～第3位の合計では、〈1〉は〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈2〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈3〉は〈16〉より多く、〈4〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈6〉は〈16〉より多く、〈7〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉〈18〉より多く、〈8〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈15〉〈16〉〈18〉より多く、〈9〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈15〉〈16〉〈18〉より多く、〈13〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈15〉〈16〉〈18〉より多く、〈15〉は〈3〉〈5〉〈6〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈16〉

表3 学系と「職業選択にあたって重視しているもの」第1位

	選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
人文社会系	人数	10	5	0	6	1	1	15	18	14	0	1	0	9	0	4	0	26	0	110
	%	9.1	4.5	0	5.5	0.9	0.9	14	16	13	0	0.9	0	8.2	0	3.6	0	24	0	100
理工系	人数	3	4	0	2	0	2	1	3	1	0	1	0	1	0	0	0	10	0	28
	%	11	14	0	7.1	0	7.1	3.6	11	3.6	0	3.6	0	3.6	0	0	0	36	0	100
医療系	人数	25	6	1	8	0	1	3	19	14	0	0	0	9	1	6	0	13	0	106
	%	24	5.7	0.9	7.5	0	0.9	2.8	18	13	0	0	0	8.5	0.9	5.7	0	12	0	100
合計	人数	38	15	1	16	1	4	19	40	29	0	2	0	19	1	10	0	49	0	244

〈18〉より多く、〈17〉は〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈15〉〈16〉〈18〉より多かった。

(2) 調査参加者の属性と「職業選択にあたって重視しているもの」

調査参加者の属性のうち、性別、所属学部、合格した入試制度によって「職業選択にあたって重視しているもの」が異なるか検討した。

1) 性別と「職業選択にあたって重視しているもの」

性別によって選ばれた項目に偏りがあるか χ^2 検定を行ったところ、第1位、第2位、第3位とも偏りは有意ではなかった($\chi^2(13)=12.75, ns$; $\chi^2(17)=13.28, ns$; $\chi^2(16)=16.68, ns$)。

2) 専攻と「職業選択にあたって重視しているもの」

所属学科によって選ばれた項目に偏りがあるか χ^2 検定を行ったところ、第1位、第2位、第3位とも偏りは有意ではなかった($\chi^2(143)=141.91, ns$; $\chi^2(187)=165.85, ns$; $\chi^2(176)=182.37, ns$)。

所属する学部を、理工系(理工学部)、人文社会系(外国語学部、経営学部、法学部、経済学部)、医療系(薬学部、看護学部)にまとめ(以下、学系)、学系によって選ばれた項目に偏りがあるか χ^2 検定を行ったところ、第1位については偏りが有意であったが、第2位、第3位については偏りは有意ではなかった($\chi^2(26)=46.01, p<.05$; $\chi^2(34)=45.77, ns$; $\chi^2(32)=36.23, ns$)。第1位の残差分析の結果、有意に多かったのは、理工系の〈6〉〈17〉、人文社会系の〈7〉、医療系の〈1〉であり、有意に少なかったのは、人文社会系の〈1〉、医療系の〈7〉〈17〉であった。なお、学系ごとの第1位として選ばれた項目を表3に示す。

3) 合格した入試制度と「職業選択にあたって重視しているもの」

合格した入試制度によって選ばれた項目に偏りがあるか χ^2 検定を行ったところ、第1位、第2位、第3位とも偏りは有意ではなかった($\chi^2(65)=51.55, ns$; $\chi^2(85)=98.93, ns$; $\chi^2(80)=59.85, ns$)。

2. 学生が就職していくにあたって必要となる能力

「学生が就職していくにあたって必要となる能力」について回答があった105名の記述内容について、KH Corder(樋口, 2014)を用いて分析した。なお、分析の単位は語とした。

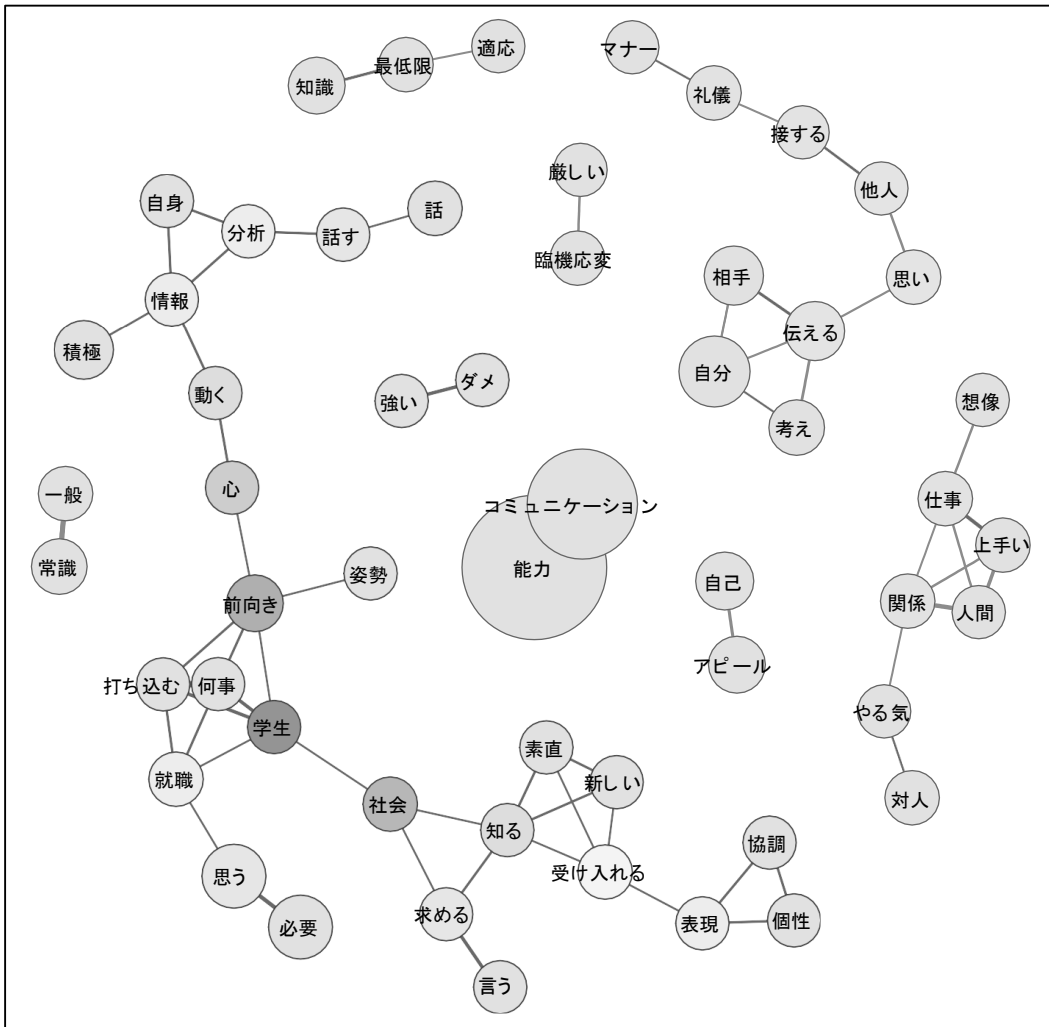
2回以上出現した語を表4に、抽出された語の共起ネットワークを図1に示す。

また、「職業選択にあたって重視しているもの」第1位～第3位として選ばれた項目、合格した入試制度、所属する学系と「学生が就職していくにあたって必要となる能力」の記述内容を示したのが表5～7である。ここにリストアップされている語は、データ全体に比して、そ

表4「学生が就職していくにあたって必要となる能力」頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
能力	79	知識	5	ダメ	2	新しい	2
コミュニケーション	50	考え	4	マナー	2	人間	2
自分	17	常識	4	何事	2	接する	2
力	17	一般	3	学生	2	素直	2
思う	11	関係	3	気持ち	2	想像	2
必要	11	最低限	3	求める	2	他人	2
人	7	仕事	3	協調	2	打ち込む	2
積極	7	思い	3	強い	2	知る	2
相手	7	社会	3	厳しい	2	適応	2
伝える	7	受け入れる	3	言う	2	動く	2
考える	6	就職	3	個性	2	表現	2
行動	6	上手い	3	姿勢	2	分析	2
自己	6	対人	3	資格	2	役割	2
対応	6	臨機応変	3	自身	2	話す	2
アピール	5	礼儀	3	守る	2		
プレゼン	5	話	3	情報	2		
前向き	5	やる気	2	心	2		

図1 「学生が就職していくにあたって必要な能力」頻出語の共起ネットワーク



の分類において特に高い確率で出現している語である。

表5「職業選択にあたって重視しているもの」と「学生が就職していくにあたって必要となる能力」

「職業選択」第1位		(数値はJaccardの類似性尺度)					
1		2	3		4		
姿勢	.133	力	.294	思考	1.000	考える	.250
対人	.125	自身	.222			構築	.200
知識	.111	自分	.136			行ける	.200
自分	.107	じょうし	.111			打ち込む	.200
対応	.105	発信	.111			何事	.200
相手	.100	違い	.111			困難	.200
伝える	.100	看護	.111			乗り越える	.200
この先	.067	振り返る	.111			学生	.167
今後	.067	規則	.111			人間	.167
チーム	.067	発言	.111			就職	.143
5		6	7		8		
専門	1.000	得意	1.000	気くばり	.167	積極	.167
良い	1.000			作法	.167	礼儀	.133
最低限	.333			立ち向かう	.167	臨機応変	.133
知識	.200			ストレス	.167	常識	.125
思う	.143			集中	.167	コミュニケーション	.123
必要	.111			度胸	.167	必要	.095
コミュニケーション	.020			個性	.143	目上	.071
能力	.016			適応	.143	集める	.071
				強い	.143	違う	.071
				礼儀	.125	何とも	.071
9		13	15		17		
話	.200	プレゼン	.300	相手	.182	能力	.282
思う	.143	能力	.095	英語	.167	自分	.150
あいさつ	.111	コミュニケーション	.094	語学	.167	力	.103
仲	.111	行動	.077	読み取る	.167	社会	.100
楽しい	.111	積極	.071	面接	.167	考える	.094
約束	.111			思い	.143	伝える	.088
上手い	.111			素直	.143	他人	.067
深める	.111			知る	.143	資格	.067
一番	.111			気持ち	.143	表現	.067
適度	.111			新しい	.143	一般	.065

考 察

「職業選択にあたって重視しているもの」第1位として最も多く選ばれたのは、〈17〉の「仕事内容が好きだと思える」(20%)であった。次いで、〈8〉「収入が安定している」(16%)、〈1〉「成長できる」(15%)、〈9〉「私生活とのバランスがとれる」(13%)が多い。これらは、第2位、第3位においても、割合は異なるものの、やはり多く選ばれている。反対に、「職業選択にあたって重視しているもの」として選ばれなかったのは、〈5〉「自分でものごとを決められる」、〈12〉「未開拓の分野である」〈16〉「完璧な仕事を追求できる」で、第1位～第3位の合計でも1%未満である。こうした「職業選択にあたって重視しているもの」の選択結果からは、現在の大学生の傾向が、「好きな仕事をしたいと願うと同時に仕事は程々に」であることが窺える。高い社会的地位や収入、自分の裁量で仕事をすることや新しいものを生み出すことにはあまり魅力を感じず、安定した収入、私生活とのバランス、人間関係、自身の成長に重きを置いている。いわば、「安定志向」「私”志向」とでも呼べるだろうか。一方、最多のものでも選択率が20%であることから、大学生の職業選択に対する意識が多様であることも示していよう。

「職業選択」第2位							
1		2		3		4	
相手	.182	求める	.250	違い	.333	熱意	.250
規則	.167	この先	.125	看護	.333	元氣	.250
意思	.167	大事	.125	合う	.333	職業	.250
発信	.167	チーム	.125	発言	.333	やる気	.200
自身	.143	パソコン	.125	感じる	.333	素直	.200
表現	.143	ロボット	.125	関わる	.333	一般	.167
守る	.143	来る	.125	実習	.333	最低限	.167
社会	.125	実現	.125	場	.333	常識	.143
受け入れる	.125	違う	.125	振り返る	.333	アピール	.125
力	.118	実力	.125	心	.250	自己	.125
5		6		7		8	
欲	1.000	じょうし	.200	今後	.200	能力	.164
適応	.500	良い	.200	働く	.200	対応	.150
最低限	.333	足りる	.200	会社	.200	行動	.150
コミュニケーション	.020	理不尽	.200	自覚	.200	自分	.138
能力	.016	自信	.200	入社	.200	対人	.111
		専門	.200	学生	.167	考え	.105
		耐える	.200	就職	.143	プレゼン	.100
		長所	.200	社会	.143	相手	.091
		マナー	.167	プレゼン	.111	伝える	.091
		最低限	.143	自分	.105	やり遂げる	.059
9		10		11		13	
能力	.203	コミュニケーション	.020	立ち向かう	.250	力	.136
コミュニケーション	.200			度胸	.250	自己	.133
自分	.118			個性	.200	思う	.118
力	.094			人	.125	積極	.118
気持ち	.091			コミュニケーション	.039	言葉遣い	.083
人	.080					堂々	.083
伝える	.074					トーク	.083
メンタル	.046					状況	.083
面接	.046					向ける	.083
構築	.046					売り込む	.083
14		15		16		17	
プレゼン	.200	約束	.167	何事	1.000	礼儀	.222
コミュニケーション	.020	筋道	.167	困難	1.000	あいさつ	.125
能力	.016	理解	.167	行ける	1.000	始める	.125
		姿勢	.143	乗り越える	1.000	徐々に	.125
		守る	.143	打ち込む	1.000	仲	.125
		話す	.143	学生	.500	目上	.125
		臨機応変	.125	就職	.333	深める	.125
		前向き	.125	前向き	.333	正しい	.125
		話	.125	考える	.200	大人	.125
		常識	.111	思う	.143	マナー	.111
18							
自ら	1.000						
考える	.200						
能力	.016						

「職業選択にあたって重視しているもの」の全体的な傾向は以上の通りであるが、調査参加者の属性ごとにみていくと、専攻する領域によって、第1位に選ぶものが異なっていた。多かったのは、理工系では〈6〉「自分の力で何かを生み出せる」(7.1%)、〈17〉「仕事内容が好きだと思える」(36%)、人文社会系では〈7〉「収入が高い」、医療系では〈1〉「成長できる」であり、少なかったのは、人文社会系の〈1〉「成長できる」、医療系の〈7〉「収入が高い」、〈17〉「仕事内容が好きだと思える」であった。こうした結果は、その領域の特性を

「職業選択」第3位							
1		2		3		4	
能力	.109	能力	.136	この先	.333	トーク	.200
あいざつ	.100	最低限	.133	テーマ	.333	得意	.200
判断	.100	コミュニケーション	.123	欠ける	.333	モラル	.200
実現	.100	考える	.118	言葉	.333	売り込む	.200
取る	.100	自分	.111	実践	.333	協調	.167
徐々に	.100	必要	.095	上手	.333	対人	.143
状況	.100	自ら	.071	想	.333	対応	.100
見る	.100	度胸	.071	すべて	.333	積極	.091
仲	.100	協力	.071	操る	.333	力	.059
周り	.100	把握	.071	パソコン	.333		
5		6		7		8	
果たす	.333	メンタル	.500	行動	.167	人	.143
語学	.333	関わる	.500	コミュ	.125	伝える	.125
思考	.333	違い	.500	回転	.125	コミュニケーション	.109
態度	.333	受け入れる	.250	耐える	.125	能力	.108
読み取る	.333	人	.167	外国	.125	力	.091
チーム	.333			構築	.125	一番	.091
面接	.333			頭	.125	創造	.091
役割	.250			理不尽	.125	勿論	.091
気持ち	.250			コミュニケーション	.115	上手い	.091
アピール	.143			資格	.111	環境	.091
9		10		11		13	
プレゼン	.200	元気	1.000	集中	.500	コミュニケーション	.153
やり遂げる	.143	職業	1.000	気づき	.500	相手	.136
諦める	.143	熱意	1.000	作法	.500	自分	.133
ダメ	.143	一般	.333	礼儀	.250	必要	.125
根気	.143	最低限	.333	行動	.143	人	.095
次	.143	常識	.250	対応	.143	伝える	.087
進む	.143	知識	.200	積極	.125	思う	.087
突然	.143	必要	.111	コミュニケーション	.020	じょうし	.056
バランス	.143	コミュニケーション	.020			働く	.056
発信	.143	能力	.016			ノミネーション	.056
14		15		17		18	
やる気	.500	ストレス	.111	積極	.214	自分	.063
対人	.333	工夫	.111	力	.150	能力	.016
関係	.333	非常	.111	対応	.143		
知識	.200	集める	.111	収集	.100		
		重要	.111	優しい	.100		
		身	.111	乗り越える	.100		
		適応	.100	看護	.100		
		動く	.100	厳しい	.100		
		情報	.100	振り返る	.100		
		強い	.100	打ち込む	.100		

考えれば首肯できる。理工系には、基本的に「ものづくり」が好きな学生が集まっており、それが実現できそうな職業を選ぶであろう。人文社会系では、学生間の興味の幅も大きいであろうし、就職する際にも、企業や職種の選択肢が、理工系・医療系に比して多い。そのような状況の中では、収入の高さが職業選択の1つの目安となることは自然なことであろう。医療系は、国家資格が必要な特定の職業を養成する学部群であり、そこに在籍する学生の大多数は、大学入学前に、大まかではあっても職業選択を済ませている。仕事内容については既に熟慮しており、大学卒業後の職業については、仕事内容以外のことに目が向けられるものと考えられる。山下（2013a）は、高校生の大学進学目的、志望大学決定理由において、「学びたい学問を学べる」が最も多いことを示しているが、本調査の結果からは、大学入学時の「学びたい学問」と大学卒業時の「就きたい職業」との間には関連があることが確認できる。

「学生が就職していくにあたって必要な能力」について自由に記述した内容には、「能力」「コミュニケーション」という語が群を抜いて多かった。「能力」と「コミュニケーション」

表6 合格した入試制度と「学生が就職していくにあたって必要となる能力」		(数値はJaccardの類似性測度)			
一般入試		指定校推薦入試	公募推薦入試		
能力	.351	マナー	.167	コミュニケーション	.279
コミュニケーション	.292	礼儀	.154	自分	.152
自分	.135	じょうし	.083	力	.136
必要	.130	環境	.083	話	.081
相手	.111	挑戦	.083	考える	.077
積極	.111	自体	.083	人	.077
プレゼン	.091	勿論	.083	行動	.075
伝える	.087	上手い	.083	対応	.075
思う	.087	ストレス	.083	動く	.054
臨機応変	.070	一番	.083	守る	.054
AO入試		センター試験利用入試	専門学科推薦・スポーツ推薦入試		
嫌う	.200	ユーズ	.250	見る	.250
度胸	.200	気づく	.250	状況	.250
立ち向かう	.200	構築	.250	売り込む	.250
気づき	.200	実現	.250	トーク	.250
好く	.200	モラル	.250	周り	.250
作法	.200	人間	.200	判断	.250
集中	.200	求める	.200	欲	.250
耐える	.200	知る	.200	適応	.200
理不尽	.200	関係	.167	分析	.200
他人	.167	社会	.167	話す	.200

は共起することが多く、すなわち、「コミュニケーション能力」ということばが頻出していることがわかる。また、「自分」「相手」「考え」「伝える」「他人」「思い」は、コミュニケーション能力と通ずるものであろう。他には、「対人関係・人間関係」「一般常識」「知識」「前向きに打ち込む」「自己アピール・プレゼン」「協調性」といったことばが目立つ。これらは、先に述べた「社会が求める力」として繰り返しいわれてきた「力」と重なる。ベネッセ教育総合研究所(2011)では、「『社会で求められる力』を学生は獲得していない」「企業と学生では『不足している力』の認識にギャップがある」とされていたが、採用する側である企業や就活支援企業等からさまざまな情報が発信され、それが蓄積されてきた中で、学生と企業との認識が近づいてきたものと考えられる。

しかし、ここで懸念されるのは、学生が自身の経験や学びから、「社会で必要なのはコミュニケーション能力である」という考えに至ったのかどうかである。教えられ、情報を受け取る中で、「社会で必要なのはコミュニケーション能力である」と“知識”としてもっている可能性や、「『前年より売り手市場(学生側が有利)』が2年連続で8割以上(日本経済団体連合会, 2017)とはいえ、やはり採用して“もらう”立場である学生が企業側に合わせている可能性もある。もちろん、社会で求められている力を知り、身につけることは必要なことではあるが、実感を伴った認識であることが求められよう。

「職業選択にあたって重視しているもの」として選択した項目や調査参加者の属性により、「学生が就職していくにあたって必要な能力」として記述された内容には特徴がある。例えば、「職業選択にあたって重視しているもの」として多く選ばれた〈17〉の「仕事内容が好きだと思える」であるが、本項目を第1位として選んだ場合は、「能力」「自分」などが特徴的な語であるが、第2位として選んだ場合は、「礼儀」「あいさつ」が高い割合で出現している。合格した入試制度や専攻学系においても同様で、それぞれに特徴的な語がある。専攻学系につい

表7 専攻学系と「学生が就職していくにあたって必要となる能力」		(数値はJaccardの類似性測度)			
理工		人文	医療		
コミュニケーション	.196	能力	.363	自分	.196
能力	.182	コミュニケーション	.343	力	.130
必要	.182	積極	.100	人	.128
求める	.118	必要	.096	対応	.125
力	.111	行動	.080	アピール	.100
社会	.111	思う	.078	伝える	.095
就職	.111	前向き	.063	相手	.095
自分	.100	協調	.042	受け入れる	.077
思う	.091	資格	.042	自己	.073
見つける	.059	マナー	.042	思い	.051

ては、「職業選択にあたって重視しているもの」第1位の項目で違いが見られたが、「学生が就職していくにあたって必要な能力」の記述内容もそれぞれに特徴的な語がみられた。理工系と人文社会系では、「コミュニケーション」「能力」がともに全体よりも高い出現率であったが、医療系においてはあまり書かれていなかった。医療系の学生は「コミュニケーション能力」よりも必要な力があると考えているということであろうか。また、理工系と人文社会系とは、「コミュニケーション」「能力」以外の特徴語が異なっている。「学生が就職していくにあたって必要な能力」について考えるとき、学生はやはり自身が進みたい業種や職種を思い浮かべるであろうし、自分の特性についても振り返るであろう。自分が希望する業種・職種で求められている力と、自分の得意なこと・苦手なことを考え合わせた結果が、今回の回答に現れているのではないだろうか。

おわりに

大学生は入学するにあたり、自分の興味や関心、特性を考慮し、漠然としたものではあっても将来の職業のことも見据えている。そしてこれらが、「職業選択にあたって重視しているもの」「学生が就職していくにあたって必要な能力」に影響を与えていることが示唆された。しかし、大学生である期間は4年あるいは6年(以上)と長い。そこでさまざまな経験をし、学んでいく。その中で、職業選択観や大学生の考える就職に必要な力は、どのように形成されていくのであろうか。また、社会で求められている力はどのようにして身につけていくのであろうか。こうしたことのためにはどのような経験が必要なのであろうか。こうしたことを検討することが今後の課題である。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所(2011) 【データで見る】学生の実態と社会で求められる力のギャップ VIEW21 大学版 2011年度特別号 Vol.1 ベネッセ教育総合研究所
http://berd.benesse.jp/up_images/magazine/021.pdf
 中央教育審議会(1999) 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申) 文部省
 中央教育審議会(2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

(答申) 文部科学省

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 (2004) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～ 文部科学省

樋口 耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版

国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書) 国立教育政策研究所

厚生労働省 (2004) 『若年者の就職能力に関する実態調査』結果 厚生労働省

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/dl/h0129-3a.pdf>

松岡 仁 就活生が誤解する「企業が求めるコミユカ」—求めているのは「話の面白さ」ではない— 東洋経済 ONLINE

<http://toyokeizai.net/articles/-/142149?page=2>

内閣府人間力戦略研究会 (2003) 人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～ 内閣府

経済産業省社会人基礎力に関する研究会 (2006) 社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ— 経済産業省

日本経済団体連合会 (2017) 2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果 日本経済団体連合会

<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>

富岡 直美・山本 圭三・吉田 佐治子・栢木 紀哉・西岡 暁廣・大久保 瑞紀 (2016) “人間性”を総合的にとらえる調査項目の検討—ライフデザインのためのツールを目指して— 日本キャリア教育学会第 38 会研究大会論文集.

富岡 直美・山本 圭三・吉田 佐治子・栢木 紀哉・西岡 暁廣・常田 真央・竹内 裕人 (2017) “人間性”を総合的にとらえる調査項目の検討—ライフデザインのためのツールを目指して (2) — 日本キャリア教育学会第 38 会研究大会論文集.

山下 仁司 (2013a) 進学目的別に見る、選ばれる大学の特徴とは? VIEW21 大学版 2013 年度 Vol.2 冬号 ベネッセ教育総合研究所

山下 仁司 (2013b) 【調査研究】高校生はどのように志望する大学を選んでいるか ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp/koutou/topics/index2.php?id=2583>

【付記】本報告は 2016 年度摂南大学研究助成「Smart and Human 研究助成金」の助成を受けた「知的専門職業人アセスメントの作成と Web システム化に関する研究(2)」のデータの一部を筆者が分析したものである。データの使用をご快諾くださった共同研究者の富岡直美氏、山本圭三氏、栢木紀哉氏、西岡暁廣氏、大久保瑞紀氏、渡辺瑞穂氏に感謝申し上げます。